

第12回 視覚障がい乳幼児研究会（研修会） －オンライン情報提供－

視覚障がい乳幼児の成長発達と早期教育

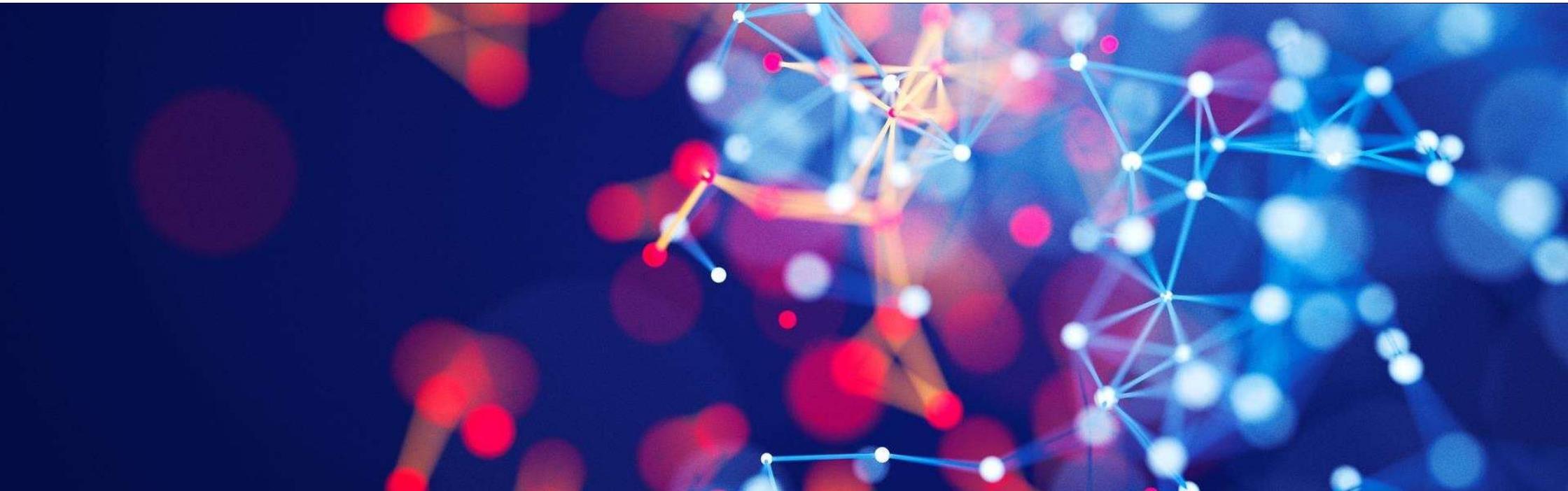
1. 第45回 視覚障がい乳幼児研究大会「栃木大会」

福田泰子先生（宇都宮大学）大会長

2. 栃木大会でのポスター発表へのお問合せが多くありましたのでオンラインでの資料提供を行います。

3. 情報提供の内容：『プロジェクトPRISM の概要』

Ferrell & Smyth (2017) に書かれているプロジェクトPRISMの紹介します。



Ferrell&Smyth(2017)

PRISM プロジェクト の紹介

山本利和 (大阪教育大学 名誉教授)

PRISM プロジェクト Ferrell&Smyth(2017)

Ferrell & Smyth (2017)が視覚障害乳幼児について記述している内容。

1. 視覚障害という診断後できるだけ早く早期介入を行うことが重要である。
 2. 盲児やロービジョン児の発達にはバラツキがある。
 3. 子どもと家族への指導を最適化するために複数の児童発達理論が利用されている。
 4. 重複する障害は視覚障害以上に発達に影響をおよぼす。
 5. 視覚障害児にも地域の仲間達と共に育つ権利がある。
- Ferrell & Smyth (2017)が紹介している内容は以下の通りです。

要点

1. 視覚障害という診断後、できるだけ早期に介入を始めることが重要。
2. 盲児やロービジョン児の発達にはバラツキがある。
3. 子どもと家族への指導を最適化するために複数の児童発達理論を活用できる。
4. 重複する障害は視覚障害以上に発達に影響をおよぼすことがある。
5. 視覚障害児にも地域の仲間達と共に育つ権利がある。

- 視覚障害乳幼児について記述している内容を紹介します。この本では要点として次のことが書かれています。
- 視覚障害乳幼児への早期支援やご家族への支援は、視覚障害乳幼児の育ちに欠かせないと思われます。これについて参考になる話題を Ferrell & Smyth (2017)は Foundations of Education (AFB 3rd Ed) の第4章「低年齢児の成長と発達」で紹介しています。
- この内容は、インクルージョン、ダイバーシティ等について考える材料になると思われます。また、子ども達との関わりについても有益な示唆がある内容と思われます。

プロジェクト PRISM

A Longitudinal Study of Developmental Patterns of Children who are Visually Impaired

ノーザン・コロラド大学で、連邦政府資金による5年間の縦断的研究を実施し、出生から5歳までの視覚障害児の発達の「進み具合」と「順序」を調査した。この研究は、米国教育省の障害者教育研究プログラムから資金援助を受け、全米7カ所で実施され、100人以上の子供たちが参加している。

次ページの表の記号の説明

2語を組み合わせて意味の通る表現をする

数字の後にくるカッコ内の記号の意味

D : 目標達成の遅れ T : 目標達成 E : 早く目標を達成 S : 順序外れ

- a VIIRCの回答者の半数未満に重複する障害があるが、この発達基準
(マイルストーン) に達している。
- b VIIRCの回答者の半数未満が、この発達基準 (マイルストーン) に達している。
- c Project PRISMでは40.5～54.4か月が最終的な評価時期である。
14名はプロジェクトの終わりまでにこれを終了しなかった。
16名のうち85.7%には重複する障害があった。

TABLE 1	視覚障害の 無い子ども	視覚障がい児				
	定型発達 (月齢)	PRISM (Ferrell, Shaw, & Deitz, 1998) (N=202)	VIIRC (Ferrell & Mamer, 1993) (N=314)	Fraiberg (1977) (N=10)	Maxfield & Buchholz (1957) (N=398)	Norris, Spaulding, & Brodie (1957) (N=66)
手を伸ばして物に触れる	5.4	8.3(D)	8.0(D)	8.3(D)	Median:0-12	50%at 9.0(D)
物を手から手に持ち替える	5.5	9.3(D)	8.0(D)	n/a	n/a	n/a
取り去られた物を探す	6.0	15.0(D,S)	12.0(D)	n/a	n/a	n/a
支えなしで5秒間ひとりで座る	6.6	10.9(D)	9.0(D,S)	8.0(D,S)	Median:13-24(D)	25%at9.0
一口大の食べ物を一人で食べる	7.4	12.6(D,S)	12.0(D)a	n/a	Median:13-24(D)	
1つ以上の子音や母音を発する	7.9	10.9(D)	12.0(D)	n/a	Median:0-12(S)	n/a
3フィート(約90cm)以上這う	9.0	12.8(D,S)	12.0(D)a	n/a	Median:13-24(D)	n/a
インタラクティブ・ゲームが出来る	9.7	11.4(T)	12.0(D)	n/a	n/a	n/a
支えなしで10フィート(約3m)歩く	13.0	19.8(D)	16.0(D)b	19.3(D)	Median:25-36(D)	
体の一部分を問われると指し示せる	17.5	19.5(T)	n/a	n/a	n/a	n/a
助けなしに簡素な服を脱ぐことができる	20.5	22.7(D)	30.0(D)	n/a	Median:37-48(D)	n/a
日常的な指示がわかる	20.5	24.3(D)	30.0(D)	n/a	n/a	n/a
2語を組み合わせて意味の通る表現をする	20.6	28.2(D,S)	24.0(D,S)b	26.3(D)	Median:37-48(D)	n/a

TABLE 1 (続き)	見える子ども	視覚障がい児				
Milestone and Median Age of Attainment by Typical Children (in Months)	定型発達 (月齢)	PRISM (Ferrell, Shaw, & Deitz, 1998) (N=202)	VIIRC (Ferrell & Mamer, 1993) (N=314)	Fraiberg (1977) (N=10)	Maxfield & Buchholz (1957) (N=398)	Norris, Spaulding, & Brodie (1957) (N=66)
I, you, meを使える	24.0	25.8(T)	36.0(D)b	n/a	Median:49-60(D)	n/a
排便、排尿を常にコントロールできる	30.0	36.5(D,S)	34.0(D,S)b	n/a	Median:37-48(D,S)	n/a
2 ケタを繰り返せる	30.0	33.4(T)	n/a	n/a	n/a	n/a
足を交互にだして階段を下りる	30.0	33.4(T)c	29.0(E,S)b	n/a	Median:49-60(D)	n/a
円の模写	33.0	31.8(E,S)c	36.0(D)b	n/a	n/a	n/a
経験したことを関連付ける	40.0	37.3(E)c	29.0(E,S)b	n/a	Median:49-60(D)	n/a

1. プロジェクトPRISMの調査結果の概要

- 12のマイルストーンの獲得年齢は、典型的な発達の子どもに比べて遅かった。
- 5つのマイルストーン（すべて表現と受容のコミュニケーションに関するもの）については、獲得年齢の中央値は定型児の到達範囲内であった。
- 2つのマイルストーンの獲得が早かった。しかし、全標本の10%未満しかデータがないため、早期獲得はやや疑わしい。
- 6つのマイルストーンは、障害のない子どもとは異なる順序で獲得された。

2. プロジェクトPRISMの結果

- 視覚障害のある幼児への教育的に早期介入方法を支持している。
- 視覚障害のある子どもたちは、障害のない子どもたちと必ずしも同じ順序で発達するわけではない。
- 視覚機能の水準が幼児の発達に影響を与えるという仮定は、PRISM参加者の視覚機能のレベルによる年齢相当の得点の分析では支持されていない。
- 視覚障害のある子どもは障害のない子どもと同じ発達の順序をたどるという仮説を疑う必要がある。

PRISMプロジェクトが示す視覚障害のある幼児の発達について

- 視覚障害のある幼児の成長・発達の仕方には大きなばらつきがある。
- 同じ技能を身につけたとしても、早く出来る子と遅い子との間に大きな時間差が生じる。この差は年齢が上がるにつれて大きくなる。つまり、同じ年齢で同じタイプの視覚障害があつて、それがたとえ同じ家庭の子であっても、発達の速度が異なることがある。
- そのため、最終的にどのような発達や行動がとれるようになるかを予測することが難しい。また、個々の子どもの発達の進み具合を事前に判断することも困難である。何がその子の違いを生み出すのかがわかりにくい。また、ある子に違いをもたらすものが、別の子には役立つかもしれないし、そうでないかもしれない。つまり、子どもは自分のペースで成長していくので、何ができて何ができないかを決めつけないようにしたい。

PRISMプロジェクトが示す視覚障害乳幼児の発達

- 視覚障害のある子どもたちは、異なる方法で学習することがある。PRISMプロジェクトでは、視覚障害児は定型発達児とは異なる順序で発達の節目を達成することが実証された。PRISMでは、ある節目は定型児よりも早く、またある節目は遅く達成されることが示された。
- 視力が良いから成績が良いとは限らない。障害のない子どもの発達に類似した発達をとげている子どもの中には、全盲の子どもも、ロービジョンの子どもも、含まれていた。
- 生後6ヶ月は、発達にとって比較的穏やかな時期のようだが、何もないわけでは無い。視覚障害乳児にとって、最初の6ヶ月は世界に「慣れる」ため、そして情報を得るための感覚パターンを確立するために使われる大切な時期である。
- 視覚障害児の多くが不利な条件下で発達を開始する。視覚障害児の多くは妊娠37週未満の早産で生まれ、小さな身体と心臓や肺が成熟するまで入院し続ける。

PRISMプロジェクトが示す視覚障害乳幼児の発達

- PRISMの子供たちの発達は、障害のない子供たちと同じような行動範囲にある。子どもたちはさまざまな年齢で能力を発揮したが、早産でない重複障害のない子どもたちは、障害のない子どもたちの範囲内で能力を発揮した。
- 視覚障害そのものよりも、重複障害のほうが、子どもの発達に大きな影響を与えるようである。
- 年齢が上がるにつれて、重複障害の影響は少なくなるようである。3歳児では、軽度重複障害のある子どもは重複障害のない子どもと同じであり、一般に重複障害のない視覚障害児に「追いつく」ようであった。軽度の追加障害の影響は、年齢とともに消失する可能性がある。
- Project PRISMに参加した子どもたちの約3分の1は、研究期間中に機能的視力が改善された。全盲の子どもや光しか見えない子どもは機能的視力が向上しない傾向にあったが、それ以外の子どもは機能的視力が向上した・・・機能的視力は単に時間の経過とともに向上する。この研究の対象となった子どもたちは、成長するにつれて、自分が見ているものを理解できるようになり、テストの場面で視覚をより効果的に使えるようになった。しかし、3分の1の子供たちの機能的視力は改善されず、むしろ低下した。

プロジェクトPRISMでは、以下のことが明らかになった (Ferrell et al.1998, 114-115)

視覚以外の障害が重複している視覚障がい児は、調査したすべての発達のマイルストーンに遅れが見られた。

視覚機能の程度別にマイルストーンを見ると、1つのマイルストーン（「大人と一緒に遊ぶ」）のみ、グループ間で有意差があった。光を感じない子どもは、視覚機能が高い子どもよりも、この行動の獲得が著しく遅かった。

PRISMプロジェクトの結果は、視覚障害のある幼児を個々の学習者としてアプローチする今日の早期介入方法を支持している。視覚障害のある子どもたちは、障害のない子どもたちと必ずしも同じ順序で発達するわけではない。視覚機能のレベルが幼児の発達に影響を与えるという仮定は、PRISM参加者の視覚機能のレベルによる年齢相当の得点の分析では支持されなかった（ただし、成長曲線分析を用いて視覚機能のレベルによる得点差を発見したHattonら(1997)のPRISM-ノースカロライナ連合調査はある）。おそらく、より重要なことは、視覚障害のある子どもは障害のない子どもと同じ発達の順序をたどるという仮説に異議を唱えなければならないということである。

3. 重複障害のインパクト

- 重複する障害は初期の発達に影響を与える。
- 重複する障害の無い子どもたちは、重複する障害の有る子どもたちよりも良好な結果を示す。
- 視覚障害の程度よりも重複する障害の方が発達への影響が大きい。
- 視覚障害を不可避の障害とみなすのではなく、改善し、習得することができるリスクとみなすようにパラダイム・シフトする必要があるかもしれない。

ありがとうございました

入会希望の お問い合わせ
お申し込みは以下の通りです。

視覚障がい乳幼児研究会

〒603-8302 京都市北区紫野花ノ坊町11

京都ライトハウスあいあい教室内

TEL : 075-462-4462 FAX : 075-462-4464

E-Mail : info@abbc88.org

